

2016.4.10 復活節第3主日

イエス7人の弟子に現れる

ヨハネによる福音 21:1-14

その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度

目である。

説教

きょうの福音はこう始まります。

その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。 21:1

イエスがローマの兵隊たちに連行され、ポンテオ・ピラトのもとで裁判にかけられ十字架にはりつけにされたとき、弟子たちは現場から逃げ出し、エルサレムから郷里に戻ってきました。(たぶん) ふるさとして呆然と日々を送っているうちに、ペトロが「わたしは漁に行く」といい出すと、他の連中も「わたしたちも一緒に行こう」といい、みんなでガリラヤ湖へ漁に出かけました。彼らはもともと漁師でした。熱く燃えた3年間は夢のように過去のものとなりつつありました。何もとれず、白々と夜が明け始めた頃あきらめて岸に向けて舟を動かします。岸まであと100メートルとなった時、湖岸に一人の男が立ち手を振っています。見知らぬ男です。その男は「何か獲れたか」と叫びます。彼らはそれに「駄目だった」と答えます。男は「それじゃもう一度だけ舟の右側に網を打ってみなさい、そうすれば獲れるはずだ」といいます。そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができませんでした。その時弟子の中でもイエスが最も可愛がっていたあの弟子がペトロに、「主だ」と言います。その声を聞くや否や、ペトロは裸同然だったので、上着をまとして湖に飛び込みました。ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来ました。獲れた魚は153匹もあったといえます。

さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあり、その上に魚がのせてあり、パンもありました。それはイエスが準備していました。イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われました。弟子たちにとっては夢なのか現実なのか判別できないほど妙な気持ちでした。前にもそういう経験をした

ことがあるような、ないような不思議な気持ちで言葉も出ず、ただ言われるままに食事をはじめました。

弟子たちはだれも「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。21:12b

グルメ番組の一分野に漁師メシというのがあります。わたしには、猟師さんたちはどうもおいしいものを食べているらしいという、やっかみがあるようでついつい見てしまいます。（とれたてのものは野菜でも魚でもおいしいでしょ）テレビ番組で放送されるのはたいてい明け方で、漁から戻って獲物で朝ごはんを食べている場面です。

<さあ、来て、朝の食事をしなさい>

ティベリア湖畔での出来事の中でいいなあと思う場面は、イエスが朝早くに一晩苦労した弟子たちを出迎え「さあ、来て、朝の食事をしなさい」（21:12）と言ってくるシーンです。テレビついでにいつてしまえば、NHKの朝の連ドラの1シーンのようです。しかし、この日々の暮らし、日常性にこそ福音があるのではないかなあと感じます。

弟子たちがイエスと過ごした3年間の内、時にはイエスが朝食の準備をして弟子たちに「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われたこともあったでしょう。あるときはお金もなく、食べ物もなく向かえた安息日の朝、イエスは弟子たちを麦畑に連れて行って「さあ、みんなで食べよう」と言われたこともありました（マタイ12:1）。弟子たちはイエスが準備した朝食を食べながら、それらの日々を思い出します。そうだ、5000人の人々が空腹であったときも、イエスは5000人分の食事を準備して、わたしたちも手伝ってみんなに配り、みんなが満足したこともありました。今、それらのことが過去の出来事ではなく、今ここで起こっていることのように思われます。イエスはわたしたちの間に、今も生きて働いておられる。もう誰も「あなたはどな

たですか」などと尋ねるものはいませんでした。今わたしたちの前におられるこの方こそ主イエス・キリストに他ならないという確信があったからです。

2月7日の年間第五主日にルカ5章から「漁師を弟子にする」という福音を読みました。そのときは弟子をリクルートする話としての記事でしたが、今日のヨハネ福音では同じ内容のものがイエスの顕現物語として取り上げられています。ルカ5章では「どこからきてどこへいくのか」という説教をしましたが。ヨハネの物語にしてもでもまた同じことだとの解釈できます。イエスの死のあと、主とともにいた弟子たちはいったいどこへいくのか。ルカではこの出来事が漁師を弟子にするというはなし、ヨハネでは弟子（漁師）を使徒にするというはなしだともいえます。弟子と使徒ではどこが違うのか、似たようなものかもしれなし、違っているかもしれません。

はじめてイエスに出会い、大漁の奇跡を目の当たりにしていきなり弟子として志願したシモン・ペトロ、彼はイエスと3年間行動をともにし、イエスを主と告白したのにイエスのことなど知らないと三度と否認し、故郷ガリラヤで漁師としての余生を送ろうとしていたところ、炭火をおこしていて朝食の準備をしているイエスの招きによって使徒とされました。

わたしたちには明日があるのかという不安。明日の食事は大丈夫かという経済的不安、これらの不安はいつでも誰でも大なり小なりかかえています。

はっきりいって、わたしたちはイエスの弟子にもなれなければ、まして使徒ともいえません。しかし、弟子でもなく使徒でもないわたしたちでもイエスを信じています。そしてイエスを信じるものには「生けるキリスト」がついています。きょうの福音、ヨハネ21章はそのことをたしかに語り教えます。
